天使A

古河　渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使Ａ

【Ｎコード】
Ｎ１１２７Ｍ

【作者名】
古河　渚

【あらすじ】
僕は彼女を失った。悲しみを癒すために、僕は彼女と二人で行った思いでの場所を訪ねる事にした。そして、その出来事はおこった。それは、鍵の付いた棺だった。棺を通りすぎる時に、僕はその中に何が入っているのかどうしても確かめたくなった。

「天使A」

1

僕はここまでどうやって来たんだろうか。

たしか車でケーブルカー乗り場の近くまで行き、それから歩いて乗車口へ、そしてケーブルカーの終点で降りてから、頂上に伸びているハイキング用の小道をずーっと歩いてきたのだ。もうどのくらい歩いたのだろうか。さっきまで眼下に見えていた地方都市の街並も見えなくなった。

それは僕がハイキング道からもそれて、道のない深い森の中に入ったからだ。午前の太陽を浴びた五月初旬の新緑の木々は美しく、これでもかというほどの躍動感と生命に満ち溢れているのに、僕にはそれも眼に入ってはいなかった。

ここには好きで恋焦がれていた彼女と何回かハイキングに来た事があった。奈々子と僕はもうすぐ結婚することになっていたのだ。

今日が何曜日なのかもわからなかったが、五月の連休の後だからか、まったく人の気配がなくハイキング道でも人とすれ違うこともなかった。

森の中にもう道はなかったが、狸や猪などが通るらしいケモノ道に行き当たることがあり、そこを歩くのは比較的楽だった。ふと気がつくと、かなり先の山を降りたところに、深いラピスラズリのような濃い青藍色の沼のようなものの存在が眼に入った。そこに行きたいと思った。その色は何年か前に飛行機でニューヨークに行くときに通過した、カナダの湖沼地帯で見たものに似ていた。飛行機の

窓から観た眼下には、たくさんの沼や湖があり皆印象的な青緑や藍色をしていた。どれも飛行機から見えるだけで、地上で実際にその沼にたどり着いた人はいないのかもしれない。いま僕が観ている深い青藍色の沼だって、まだだれもたどり着いた人はいないのだ。僕がそこに着いたならば、僕はただ忽然と消えてしまえばいいのだ。たぶん、あの深い藍色の沼ならば僕の痕跡をこの世界から完全に消滅させることができる。

そこに向かって深い森の中を進んでいくと、少し広い小道に出た。両脇から高木の枝が延びて薄ぐらいが踏みしめられていて歩きやすい。よく観ると色とりどりのキノコ類や光輝く鉱物が道の袖に点在している。どこかで同じような場所を通ったような気がした。

「そうだ、ファイナルファンタジーに出てくる幻光河からグアドサラムに向かう道がこんな感じだったかな。巨大なサソリの化け物なんかがいるのだろうか」

奈々子が僕のワンルームマンションに遊びに来ると、二人でよくファイナルファンタジーをやった。午前中にきて翌日まで徹夜で連続二十時間くらいやったこともある。

「私もユウナみたいに召喚獣が呼べたらいいのになあ…、ねえ、祐介は何が気に入ってるの？　私はイクシオンかな」

「奈々子はテレビゲームも好きだったんだ」

「そう、それで、あなた達どうやって出会ったのかしら？」

「僕は奈々子に絵を見に行かないかって誘ったんだ」

僕は誰かと会話していたのだろうか？　そんなことはない。僕は一人でここに来たのだし、山道で人と出会ったのもかなり前のことだ。そうか、これは一人芝居なのだ。

「ねえ、岡崎さんて絵なんか興味あるのかな？　もしよかったら、今度の日曜に上野の美術館でやってるダリ展にいかないか」

「絵ですか。実は、わたし絵を見るの好きですよ。でもいいんですか、わたしで」

「もちろんだよ。前売りのチケットを二枚買うから、二人で行こう。

待ち合わせの場所と時間はメールするからさ」
　僕は初めて彼女を誘ったときのことを思い出していた。僕はそのとき二十七歳で、奈々子は短大を出て入社した二年目で二十二歳だった。それから僕等は毎週のようにデートをするようになった。
「その冬に、彼女を一泊のスキーに誘ったんだ。志賀高原に。少し遠かったから彼女を迎えに行って、それから徹夜で十時間くらいかかったけど、奈々子は志賀の林間コースをすごく気に入って、また一緒に来ようって約束したんだ。その夜、僕等は初めて結ばれたんだ」
「そう、素敵な思い出じゃない」
「でも、もう奈々子はいないんだ。あの日わき見運転をしていたトラックに…」
　森の木々がなくなり小路は広い草原に出た。そして草原の先に小さな藍色の沼があった。
　草原は膝下くらいの背丈の新緑の草で覆われ、黄緑一色で染められていて一輪の花も無かった。草を踏みしめて沼に向かっていくと、それは遠くから見ているのよりずーっと深い藍色だということがわかった。沼の周りは硬い切り立った岩肌で覆われていて、いつか写真でみた摩周湖のようだった。
　でも、きっと透明度を計る金属板を落としたならば、光が届く限界までその姿を見ることが可能だろう。摩周湖よりもバイカル湖よりも透明で深い。きっと世界一透明なのだ。
　僕はあの水に足を触れるだけでいいのだ。光さえ届かない深い深い漆黒の湖底で僕は眠りたいと思った。さらに近づくと、沼の手前に奇妙な人工物が置かれていることに気づいた。それはキラキラと輝く花崗岩だったのだろうか？　それとも鈍く輝く金属だったのだろうか？　色や材質を思い出すことはできないが、形はよく覚えている。
　それは、鍵の付いた棺だった。棺を通りすぎる時に、僕はその中に『何が入っているのか』どうしても確かめたくなった。

「あの沼に僕自身を吸い込ませる前に、これを開けなければならないんだ」
僕は棺を触りながら一周してみた。とても頑丈で簡単に開くような感じではなかったが、鍵を壊せば開けられるような気がした。まわりには、赤茶色をした手のひらより少し大きな石がいくつか転がっていた。僕は石を取り、それを鍵にぶつけて壊そうとした。
「だめよ。それは開けないで！」
鋭い声が耳に響いた。

2

「天使って以外と疲れる」
天使Ａはドアを開けると、神様に向かってぶっきらぼうに言った。
「まあまあそう言わないで、こっちに座ってお茶でも飲まないかい？」
神様と呼ばれたあごに長い白髭を蓄えた老人が、やさしそうな声で問いかけた。
「何言ってんのよ。いつもわたしばっかり行かせてるくせに、わたし、お茶なんか飲みたくない、ご飯にして！」
「まあそんなに疲れたって、今日はなんかあったのかい？」
「そうよ、今日は久しぶりにお持ち帰りだったのよ。もう、大変なんだから」
「ほうー、それは久しぶりじゃのー、えー何年ぶりじゃ」
「そんなに久しくない、だいたい一ケ月に一人は連れて来てるって」
「そうか、まあ、それは大変じゃったのー、食事を取ったら、しばらく休んだらどうじゃ」
「そうするわ、じゃないとこれからの作業に差し支えるから。じゃー、神様もあんまりゲームやりすぎて夜更かしなんかしないでよ」

3

「私たちのレベルの天使の仕事は主に二つだ。一つはあんたたち人間が見る夢の救出だ」

僕は白い机の前で座っていて、机の反対側には、白いふわふわの布みたいなものに包まれた天使がいた。それは女の体のような気がしたが正確には判らなかった。だいたい天使のイメージに合っていたが羽はなくて、しゃべりかたが変だと思った。

「夢の救出って？」

「ほら、あんただって寝覚めの悪い夢みることあっただろー。妖怪に追い掛けられるだとか、空を飛んでたら急に浮力が無くなってまっ逆さまとか、ああいうやつさ」

「全然判りませんよ。そーゆう夢って見ることありますけど、それが何だっていうんですか」

「本当に知らないのか？　あのな、あれはほっといたら、妖怪につかまって酷い目にあったり、コンクリートの床に叩き付けられて大怪我したりするんだ。だから、そうなる前に私たち天使が、夢を救出してるんだ。夢の最後で私たちがよかったねーって手を振ってんのを知らんのか」

「いやー、全然知りませんでした」

「まあいいよ、そのうちお前も仕組みがわかってくるから」

「あのー、ひとつ質問なんですけど、天使っていうのは、あの天使ですか、よく絵画なんかでみる羽が生えていて空を飛べる？」

「まあな、そう思ってくれていいよ」

「でもあなたは女性なんですか男性なんですか。女性にしてはしゃべり方がへんだけど」

「天使に性別なんかあるもんか。お前のイメージを投影して出てるだけだよ。もっと色っぽくして欲しかったらイメージを創れ、そうすれば、ほらあのアニメにでてくる松本乱菊みたいになるから」

「えー、少年ジャンプのブリーチ読んでるんですか？」
「当たり前だ。下界のことは全て勉強しているからな」
「それで、僕はどこにいて何をしてるんでしょうか？　まさか、ソウルソサエティーだなんて言うんじゃないでしょうね」
「うーん、その質問にはすぐには答えられん。その説明は後にしてくれないかな」
　それから僕が救出する夢とそうじゃない夢をどうやって見分けるのかと尋ねると、天使は部屋の壁の一面を透明にした。そこからは夜の町並みが低空の飛行機から見ているように鮮明に見えた。
「ほら、夢の在るところから黄色や青の透明な光の帯が上空に放射されてるんだ。でも、ほら、あそこを見てみろ」
　天使の指した方向には、透明な光とは別物の、まるで煙突から吐き出された濃い煙のようなものが上空に立ち昇っている。煙はいろいろな原色が渦をまいて混ざったような複雑な色をしていた。
「あそこに、救出すべき夢があるんだ。心配するな、まもなく仲間がそこに向かうから」
　説明が終わると、天使は疲れたから少し休むと言って出ていった。
　その部屋は白い壁で覆われた殺風景な部屋で、犯罪容疑者ってのはこんなところで取り調べられるんじゃないかと思った。僕は部屋の隅にあるベットに横になって、もう少し色っぽい天使のことを想像してみた。

4

　ここでは時間がどうなっているのかが解らなかった。だから、次に天使が来たときに、どのくらいの時がたったのか検討がつかなかった。
「おはよう」
「え、あー、あのー、この前の天使さんとは違うんですね」

「やだー、同じよぅ。あなたの天使へのイメージが変わったからじゃないかしら」
「でも、衣装も違いますよ。なんか秋葉原のメイド喫茶みたいじゃないですか」
「そうよ。あなたがこういうミニスカートにして欲しいってイメージしたからよ。ほら、胸だってこんなに大きいのよ」
天使はうれしそうに僕のほうを向いて微笑んだ。もう天使に萌えてしまいそうな気分だった。
「ところで、あなたが来た理由なんだけど、話してもいいかしら」
「えっ、ええ」
「あなたの夢を地上で修正することが困難だったからよ。たいていの夢はその場で修正してしまうの、もちろん人間に修正の記憶は残らないから、あなた達が見たと思っている夢は修正後のものなのよ。悪夢だってあるけど、あれだって修正前に比べればかなりましになってるわ」
「でも僕の夢はひどすぎた」
「そうよ。魂のレベルでの深層意識に傷をおうと、修正は困難になることが多いのよ。その場合天使に許されているのは、ここに連れてくることだけなのよ」
「それで、僕はどうなるんでしょうか？」
「そう、ここからが難しいのよ。二つ選べるわ。まず、あなたはその傷を残したままで地上に帰ることができる。つまりこのまま帰るっていうことよ。もう一つは、なんとかその傷を消して地上に帰ることができる。この二つなのよ。どっちにしても、ここでの記憶は消されているけど」
「だったら、傷を消して帰るほうがいいに決まってるじゃないですか」
「それがそう簡単じゃないのよ。傷を消去するってことが」
「傷を消すってどうするんですか？」
「よく聞いて、その方法は一人一人でみんな違うのよ。だから、あ

なたの場合で説明するわ。地上時間で約三ヶ月前にあなたの恋人、奈々子さんがここに来たの。そして、彼女はいまそこにいるわ」
「そこってどこですか？」
「その扉の向こうよ。でも、その扉は天使しか開けられないわ。」
　僕は取り乱していた。
「お，お願いします。彼女に、奈々子に会わせてください。僕は…、僕は、あまりに悲しくて葬式にもお通夜にも行けなかったんだ…」
　僕は激しく泣いていた。
「落ち着いて、本当に落ち着いてよく話しを聞いて。いい、あの扉の向こうは地上での体を失った霊の世界なのよ。彼女の霊体も深く傷ついていてひどい状態なのよ」
「何がどうひどいんですか？　僕には彼女を助けることができないんですか？」
「できるかもしれないし、できないかもしれない。天使にも予測できないのよ」
「どうすればいいんですか？」
「その前にあなたに地獄の話をするわ。ひとつの例えだけど、あの扉の向こうに一人のお爺さんがいるわ。彼はもう百年もそこにいるけれど、来た時と全く変わってないのよ。彼はすごいお金持ちだったのよ。それで今もお金のことばかり考えているの。いろいろな霊がきて話をしても、お金への執着が強すぎて何も聞くことができないの、あと何百年いや何千年そうするのかしら。その状態こそが彼に与えられた地獄なのよ」
「お金はそうかもしれないけど、愛は、愛はちがうんですよね？　僕等は本当に愛し合っていたんですよ」
「それが、残念だけど同じなのよ。その愛はほとんどの場合自分に向いているから、やっぱり強く執着するのよ。ある意味お金より執着が強いかもしれないわ」
「それで、奈々子を助ける方法は？」
「二人とも、お互いを完全に忘れるのよ」

5

天使は、奈々子にも話をしなければならないといって出ていった。
天使は、忘れるためならば彼女に会えるといい、僕は会いたいと言った。奈々子も同じ意思ならば会えるらしい。僕たちはお互いを忘れるために再び出会うことができるのだ。でも、出会った後にどういう結末をむかえるかは、天使にもわからないらしい。お互いを完全に忘れてしまったペアもいたし、今も二人で愛欲にまみれて、そこに居つづけるペアもいるらしい。天使にいわせると、それはそれで、やはり地獄なのだそうだ。
僕は出会いから別れまでをよく思い出そうとしていた。忘れるどころか、細部まで克明に覚えていた、特に二回目の冬に二人で行った志賀高原のことを。僕等は日が暮れた後のナイターゲレンデにいて、リフトでゲレンデ上部にでた。そのゲレンデの上部には照明の届かない林間コースがあった。
「ねえ奈々子、ちょっと林間コースに行ってみようよ」
「えー、だめよ。照明が届かないし暗いわよ」
「それほど奥に行かなければ大丈夫だよ。月も出てるし、雪は光を反射するから、眼がなれれば以外と明るいんだ」
「じゃー約束よ、そんなに遠くへは行かないって」
そのゲレンデ上部は林間コースの出口に繋がっていたから、僕等はスキーを脱いで担いで歩いて登った。それほど奥には入らなかったから照明の乱反射で想像したより明るかった。でも、昼間でもシーンとしている雪の森の中は、本当に二人の声以外には、音の無い世界だった。
「奈々子、もう一度ここに来れたならば話そうと思っていたんだ」
「え…」
「この林間コースにあと百回君を連れて来たいんだ。だから、奈々

子の許可がほしい」
「え…、それって…、私がおばあさんになっても…」
「ああ、そうしたい…、二人で毎年来たいんだ」
僕は緊張していて、少し声が上ずっていた。付き合って一年四ヶ月、初めてのプロポーズだ。彼女の答えを彼女の声で聞くまでは不安だった。
「うん…、いいよ。私を毎年連れてきて、約束してね、祐介」
僕は本当にうれしくて、ゲレンデを転がって降りたいくらいだった。
でも、いまは、全てを忘れるためにここにいる。
本当に忘れることなんかできるのだろうか？　それが彼女への真実の愛なのだろうか？

天使が来て僕に告げた。
「彼女は会いたいそうよ。もうあなたには時間があまりないから、覚悟ができたらその扉を開けるのよ。そこに彼女がいるわ。それから、忘れないで、その扉のむこうでは執着と欲望が剥き出しになるの。あなたたちが強い快楽を伴ったセックスを求めれば、それは何でも可能なのよ。あなたの本当の愛が試されるのよ」
それだけ言うと、天使の姿は消えていた。僕は扉を押してみた。扉は簡単に開いて、すぐそこに彼女が立って泣いていた。
「ごめんね祐介、ごめんね祐介」
奈々子は僕の胸で泣きじゃくった。
「いいんだ奈々子、いいんだよ。ただ急だったから、僕も生きる気力がなくなったんだ」
「私、あなたに送ってもらえばよかったんだわ。でも、あの日友達に会って、今度結婚するんだって伝えたかったから、だからあそこで別れて…」
「僕も仕事があるからなんて言わないで、友達にいっしょに会えばよかったんだ。そうすれば、きっと奈々子を守ってやることができ

たんだ」
「ごめんね祐介、私、あの交差点でトラックが危ないなって思ったのよ。でもヒールの踵が抜けなかったの。そのハイヒールとっても素敵だったから、あなたに見せたいと思ってあの日初めてはいたのよ。でも、ハイヒールなんてはきなれてなかったから…」
　僕は奈々子を思いっきり抱きしめた。天使の話なんかどうでもよかった。僕はここで彼女とずーっとすごしたかった。
「ねえ奈々子、僕らはここでずーっと一緒にすごそうよ。僕らがそう思えばずーっと一緒にいられるって、天使が言っていたんだ」
「だめよ祐介、そんなこと言わないで」
「だって、結婚してずーっと一緒にいようって約束したじゃないか」
「だめよ。だめ…、もう言わないで、私もそうしたくなってしまうから」
　奈々子は僕の胸に顔をうずめて泣いた。会ったときよりも激しく泣いた。
「祐介は生きているから帰らなくちゃいけないのよ…、そして、私が祐介を忘れなければ…、祐介は必ず私をさがしに来るから…」
「そうか、僕も天使から聞いたんだ。奈々子は全ての執着や欲望を脱ぎ捨てて、もっと先の世界に進まなければならないって…、でも、僕が奈々子を忘れなければ…、奈々子はここから先には進めないだろうって…」
　いったいどのくらい時間がたったのだろう。僕の胸は彼女の涙で濡れていて、彼女の髪は僕の涙で濡れていた。二人は裸で抱き合っていた。
「私の決意は変わらないのよ。ただ全てを忘れる前に、祐介の全てを記憶したいの。たぶん、これが私と祐介がひとつに結ばれる最後なのよ」
　僕たちは、いままでにないほど激しくお互いを求めあい、体の全てを愛撫した。奈々子の手は僕の性器をいつまでも愛おしそうに愛撫し、僕は奈々子のそこにそっと口づけした。僕らは本当に一つに

なるのではないかと思うくらい強く抱きしめ合った。奈々子のしなやかな体を抱きしめながら、考えていた。奈々子の決意は揺るがないだろう。全ては僕に掛かっているのだ、僕は奈々子の希望を叶えたいと思った。

天使が立っていた。
「あなたたち、どうやら決意がきまったようね」
「ありがとうアンテーヌ、私たちお互いのことを忘れることにしたの」
アンテーヌ？　あの天使はそういう名前だったのか。僕が聞いていたのは確か天使Ａだったはずだ。天使は一人だけれど、僕と彼女が見ているのは別の姿なのだろうか。
「決意が固まったなら、さっそく実行しなければならないのよ」
気がつくと、別のもう一つの扉がそこに在った。
「これは転生門と呼ばれるの。あなたたちは、二人でこの扉を開いて先に進むのよ。入ったら、まずは二人で手を繋いでいていいわ。そしてこの紐が二人の手のひらを結びつけるわ」
天使は短い赤い糸を出してきて、端を僕と奈々子に握らせた。その紐の端は僕等の手の平に吸収されて一体化した。見ると僕と奈々子の間で糸はピンと張っていた。
「この糸は二人が離れてもいつもピンと張っているのよ。中に入って落ち着いたら、二人は手を離して反対方向を向くのよ。そしてその方向にずうーっと歩いていって」
「別の方向に歩くって、この糸はどうなるんですか？」
「よく聞いて、この糸はあなた達の記憶でできているのよ。だから離れても二人を結びつけてピーンと張っているの。でも、あなた達はとにかく別の方向に歩きつづけるのよ。そして…、残念だけど、この糸はいつか必ず切れるのよ」
奈々子は天使の話を聞いて、また泣きじゃくった。最後の時が近づいて心が乱れたのだ。

「奈々子、二人で中に入ろう。僕は君を絶対わすれない。きっといつか、きっといつか…、どこかでまた遭えるから…」
僕の声も涙で滲んでいた。
「悲しいのよ…、この糸が…、私たちの記憶の糸が切れてしまうのよ…、祐介のこと、もう永遠に思い出せなくなるのよ…」
「アンテーヌ」
奈々子は天使の名前を呼んだ。
「お願い、最後のお願いがあるの…、糸を、糸の色を白に変えてほしいの…」
「うーん、これは必ず赤って決まってるんだけど…。まあいいわ、少し上界からは見えにくくなるけど、まあ問題ないでしょう。じゃあ、白に変えてあげるわ」
天使が言った後で糸は白く変わっていた。
「もうひとつ、中に入ったら二人とも一言も話してはいけないわ」
「それで、どこまで歩くんですか?」
「糸が切れるまでよ。どのくらいで糸が切れるのかは記憶の強さによるから私にも予測はできないの。でも、やがて切れたときには、あなたは地上世界へ、あなたは上の世界へ到達しているはずよ」
僕らは二人でお互いの手が千切れるほど強く握って中に入った。白一色の濃密な霧の中で奈々子の顔もよくは見えなかった。絶対この手を離さないと思ったが、気がつくと奈々子の手は離れていた。それから僕がどのくらい歩いたのかはわからない。白い糸は濃密な霧の中に溶け込んで全く見えなかった。

6

眼を覚ますと、そこは会社のデスクで僕は机に突っ伏して寝ていたのだ。時計を見ると昼休みの時間を十分くらいオーバーしていた。土日にひどく飲んだせいで二日酔いぎみだった。女の子がお茶を運

んできた。
「ねえ、僕ひどい顔してない。いま起きたばっかりなんだ」
「ええ、ほんとにひどい顔してますよ。二日酔いですか？　だったら、この濃いお茶がいいと思いますけど」
　彼女は僕の顔をみて微笑むと、机にお茶を置いた。
「えーと、君なんていう名前だったっけ？　ごめん、僕もの覚えが悪いんだ」
「えー、まだ覚えてないんですか？　もうここに配属されて三ヶ月もたつんですよ。もう、覚えてくださいよ。私、岡崎奈々子です」
「ふーん、ところで、岡崎さん…、君、絵なんか興味あるのかな？　もし興味があるんなら、今度の日曜に渋谷でやってるシャガール展にいかないか」
「シャガールですか。実は、わたしシャガール好きなんですよ。でもいいんですか、わたしで」
「もちろんだよ。前売りのチケットを二枚買うから、二人で行こう。待ち合わせの場所と時間はメールするよ」

「ねえ神様、あの転生門壊れてたって報告あったけど。どうすんの？　報告書には記憶の糸の切断端部が発見できなかったって書いてある」
「へんじゃのう、あれが壊れるなんて何年ぶりかのう？」
「たぶん、三十五年ぶりね。二人とも下界に降りてったそうよ」
「ああそうか、じゃー、お茶を飲んだら、すぐに直しておくよ」
「もう、しっかりしてよ。転生門の管理だけが神様の仕事なんだから」
「ああ、それじゃー周辺の記憶補正はよろしく頼むよ」
「もう、やり終えました」
「おお、さすがは天使Ａじゃのー、ほっほっほっ」
「じゃー、また夢の見回り行ってくるわ」

「ああ、気をつけてな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1127m/

天使A

2010年10月8日14時36分発行